

南川高志著「マルクス・アウレリウス『自省録』のローマ帝国」岩波新書、岩波書店 2022年12月20日刊を読む

## 「現在」を大切に生きる

1. 「死を自然のものとして受け入れること」「死」の反対にある「生」とは、「現在」である。
2. (1)それと同時に記憶せよ、各人はただ現在、この一瞬間にすぎない現在のみを生きるのだという  
ことを。  
(2)その他は、すでに生きられてしまったか、もしくはまだ未知のものに属する。  
ゆえに、各人の一生は小さく、彼の生きる地上の片隅も小さい。  
(3)また、最も長く続く死後の名声といえども小さく、それも、すみやかに死に行く小子どもが、  
次々とこれを受けついで行くことによるにすぎない。  
(4)その小子どもは、自己を知らず、まして、大昔に死んでしまった人間のことなど、知る由も  
ないのである。
3. <「現在」の大切さ>  
(1)たとえ君が三千年生きるとしても、いや三万年生きるとしても、記憶すべきは、なんびとも現  
在生きている生涯以外の何ものをも失うことはないということ、また、なんびとも今失おうとし  
ている生涯以外の何ものをも生きることはない。  
(2)なんびとも過去や未来を失うことはできない。  
(3)もっとも長命の者も、もっとも早死する者も、失うものは同じである。  
(4)なぜならば、人が失いうるものは現在だけなのである。というのは彼が持っているのはこれの  
みであり、なんびとも自分の持っていないものを失うことはできないからである。
4. <要するに、人生は短い>  
(1)正しい条理と正義をもって現在を利用しなくてはならない。  
(2)くつろぎのときにもまじめであれ。現在を大事にせよ。  
○この「現在」を大事にせよというマルクスの考えは、ストア派の思想の特徴としてこれまで哲  
学者が幾度も指摘してきたことであった。しかし、哲学思想の一部としてではなく、彼の人生  
に即して改めて見てみると、「現在」を大切に生きることは、アントニヌス帝の範に則って生  
きることに重なり、マルクス独自の「生き方」を生み出したように思われる。
5. <至る時にかたく決心せよ>  
(1)ローマ人として男性として、自分が現在手に引き受けていることを、几帳面な飾り気のない  
感厳をもって、愛情をもって、独立と正義をもって果そうと、  
(2)また他のあらゆる思念から離れて自分に休息を与えようと、  
(3)その休息を与えるには、一つ一つの行動を一生の最後のもののごとくおこない、あらゆるで  
たらめや、理性の命ずることにたいする熱情的な嫌悪などを捨て去り、またすべての偽善や、

利己心や自己の分にたいする不満を捨て去ればよい。

6. (1) こうした決意をし、「今すぐにも人生を去って行くことのできる者のごとくあらゆることをおこない、話し、考えること。」
- (2) 名誉を得ることや死後の永遠は考えるべきことではない。
- (3) 一生懸命働くとすれば「現在」のためであり、死後のためではない。
- (4) 現在自分に与えられた課題に懸命に働くことを信条とする。

#### 7. 〈皇帝マルクスの生き方の本質〉

「万民を一つの法律の下に置き、権利の平等と言論の自由を基礎とし、臣民の自由をなによりもまず尊重する主権をそなえた政体の概念をえたこと」に感謝する。この箇所は、『自省録』中ではきわめて珍しい、政治的な概念への言及である。マルクスが「ストア派の哲学者の反皇帝行動」に登場したトラセアやヘルウィディウスらについて知ることができたのも、同じセウェルスからであった。言論の自由、臣民の自由を尊重する政体とは、一世紀に反皇帝行動をとったストア派哲学者の元老院議員たちが求めたものである。それを奪う皇帝独裁体制に陥らないようにマルクスが注意していたことも、すでに本書第一章末尾で述べたところである。マルクスは元老院を尊重する姿勢を維持し、それによってローマの伝統的な政治理念「自由」を実現した。それもまた、彼独自のものではなく、ギリシアの思潮影響でもなく、ただ先帝アントニヌスの統治の教えに従っただけのことであった。

8. (1) マルクスは、帝国住民の安寧のために働こうと努力した。
- (2) しかし、その治世において、彼は疫病大流行、戦争、反乱に遭遇し、危機的状況の中でただ懸命に皇帝の職務に励むことしかできなかった。
- (3) 哲学の理念や政体の理想を目指してではなく、先帝アントニヌスの範に従って懸命に働くこと、それが彼の生き方であったとってよいのではないか。

9. (1) 「働け、みじめな者としてではなく、人に憐れまれたり感心されたい者としてでもなく働け。」
- (2) ただ一事を志せ。
- (3) 社会的理性の命ずるがままに、あるいは行動し、あるいは行動せぬことを。」

○若き日から帝国統治に皇帝位継承予定者として関わり、即位後は二〇年近くも最高責任者としての日々を送ったマルクスは、人々の「自由」を実現するため懸命に努力を尽くしたが、自分自身は思索の中でしか「自由」を得ることができずに終わったのである。

#### <コメント>

「自省録」の著者である、疫病の蔓延と戦争の中で大帝国を背負い、ローマ帝国の繁栄を築いたマルクス・アウレリウスの「哲人皇帝」の生き方を知るのに参考になります。エドワード・ギボン著「ローマ帝国衰亡史」はマルクス・アウレリウスの評価を集大成したものといわれます。是非御一読ください。